

笹川保健財団 奨学金支援
助成番号：2020B2-001

2021年3月10日

公益財団法人 笹川保健財団
会長 喜多悦子 殿

2020年度奨学金支援
完了報告書

標記について、下記の通り完了報告書を添付し提出いたします。

記

進学先 タンペレ大学(フィンランド)

氏名 久末 智実

修学した内容 今後どのように研究や仕事に生かしたいか

タンペレ大学 社会学部健康科学学科 博士課程
久末 智実

2020 -2021 年は、COVID 19 の影響により 自分が今まで受けて来た教育環境の中で最も適応力と忍耐力を求められた1年でした。留学先のフィンランドにおいても2020年3月一時的にロックダウンが開始され、大学は全てオンライン授業に切り替えられました。図書館で勉強はできなくなり、予定していた他国でのコース受講は中止、カンファレンスも延期またはオンラインに変更になりました。当初モチベーションの低下はありましたが、オンライン授業やオンライン会議が日常となり新たな機会や出会いを体験することができました。

私が所属する大学では博士課程の修了条件として必要単位の取得、3つの投稿論文が受理されることが求められています。私は必要最低限の単位の取得をほぼ終え現在は自分の研究に特に関連した科目の受講、研究に集中しています。フィンランドは英語が通じる国とはいえ、国の法律、医療政策などの重要な事柄は全てフィンランド語またはスウェーデン語になります。そのため今年は特に語学の強化にも力を入れました。研究トピックを通じてフィンランド国立健康福祉研究所 (Finnish Institute for Health and Welfare (THL)の訪問研究員になることができ、国の暴力対策がどのように行われているか、またフィンランド人の働き方、文化や歴史についても深く学ぶことができました。

私の研究テーマは フィンランドにおけるパートナー間における暴力被害者の医療費、そして医療サービスの利用についてです。先行研究では暴力被害体験によって暴力被害者と子どもには様々な心身の健康障害が引き起こされること、メンタルヘルス、特にうつ病や PTSD の発症が高いことが知られています。そのため暴力被害者は暴力被害経験のない方と比べて医療サービスを多く使用することが明らかになっています。また、国にとってもパートナー間における暴力に関連する警察の費用、シェルター運営の費用、労働力の喪失、また医療費の増大により社会的にも大きな損失をもたらします。フィンランドでは暴力と経済的損失、医療費に関する研究は20年ほど行われてきませんでした。そのため暴力被害者がどのように医療サービスを利用しているのかを明らかにすることは政策提言につながります。

COVID19により日本の看護管理者、看護学生の方とセミナーや授業を通して交流できるようになったことは大変貴重な経験でした。まず博士を修了してからと遠い先の未来のように感じていましたが、日本の大学でも授業オンライン化が可能になったことにより国際化の概念が大きく変わったように思います。対話を通して、“自分も留学したい”、“フィンランドも良いが日本も良い”というように若い学生さんから沢山の感想をいただき、教える楽しさを体験しました。日本の看護の質の高さを実感するとともに 多様性に一步踏み込めない看護管理者さん達の悩みも対話を通じて感じました。博士が修了してから何かに取り組むと区切るのではなく外国で学んでいる今だからこそ日本の看護学生、看護管理者へ向けて情報発信ができるのではないかと思います。

今後の学びについて

今年は色々な意味で人生のターニングポイントになりました。専門分野だけではなく、幅広い分野の本を読み、アカデミアだけではなく沢山の人がオンラインを通して出会いました。“なぜなのか”という深い問い。“言葉の持つ意味の深さ”。“難しいことを易しい言葉で表現する能力” 自分の勉強不足や能力不足を痛感しました。専門性が高いことは大事ですが、どうすれば物事が伝わるのか、ダイアログ、コミュニケーション、リーダーシップ 博士課程はただ論文を書くだけではなく情報を発信するための様々な能力が必要であると思います。その事実気づき今後改善すべき点が明らかになりました。

看護師が看護の専門性を持つことは大事ですが、以前 日本で働いていた時に 私がそうであったように病院の中で勤務し 病院関係者と話すだけでは社会の全体像が見えません。患者さんが行動変容に至らない理由はもっと深いところにあると思うからです。今年も引き続き日本の看護師さんと交流を続けていきますが、話をするとき社会的、経済的視点を持てるように関わっていきたいと思います。また若い学生さんには 海外の話を通して世界の中の日本を考えていける教育的関わりを継続していきたいと思います。

知識を持ち良い研究論文が書けることはもちろんですが、先日出席した研究セミナーでも現代の博士課程に求められることは総合力であると言われていました。大学で研究者として生きるというだけの一つのゴールではなくってきており、いかに社会に情報発信できるかという多様性がキーワードになってきています。特に私達は COVID 19 の後の世界を考えて生きています。2021 年も良い研究論文も書けるように取り組みつつ、日本そして世界への情報発信も大事な役割として取り組んでいきたいと思っています。